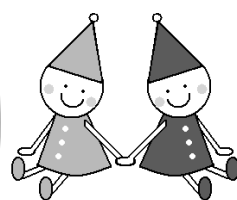


支援センターだより



2010.10.発行 vol.72

暑い夏もやっと遠のき、ニョキッと伸びた赤い彼岸花が咲いています。過ごしやすい秋の季節がしばらく続くとよいのですが、思いがけない涼風で体を冷やしたりしませんように、あの事この事いろいろ思うこともあるでしょうが、一人で悩まず、どうぞセンターへご連絡ください。

朝の出会い…



「わあ、久しぶり」と心の中で叫んでいました。通勤バスの中で時々出会っていた親子さん。大きなバッグは保育園用の荷物かな。お母さんの背中に埋もれそうにおんぶして、お顔だけチョコンと出していた女の子。まっ黒な瞳でキョロキョロ周囲を見回している朝もあり、母の背でウトウトしていることもあり、時々目が合うと私の方をじっと見つめていたのですが、そのうち見たことあるぞと思うのか、にこっとしてくれるようになりました。私の方も見知った親子さんに思わず「おはよう」と声をかけて挨拶してしまい、母に怪訝な表情で見られたりしていました。内気そうで伏し目がちな母に、これ以上言葉をかけては悪いかと遠慮して、もっぱら女の子にアピールしている出会いでした。

あれから1年、今朝バスを降りると、母は女の子を地面におろして2人で手をつないで歩き始めました。たどたどしい歩き方ですが、もう間もなく母のおんぶ通勤も終わるのでしょうか。母子ふたりの傍らをさわやかな秋風が吹いていきました。



下に載せた新聞のコラムを見て、子どもが健やかに育っていけば、大人顔負けの判断力（洞察力）ができてくるものだど心強く感じました。それにしても変な大人がいるものだど、切り抜きしてセンターのスタッフたちにも読んでもらいました。とんでもない出題をした教諭はゲーム脳の人なのか。命はリセットできないのですから「〇人殺して」は間違っても言うてはならない言葉です。ここまで命を軽く扱える人種が現れることに危機感を持ちます。

編集手帳

題名を『命屋』という。ハ「命屋」さんがあればいいね／でも／命を買い替えられたら／みんな一生けん命／生きないかもね／そしたら／つまり

ない人生になるね／◆かつて本紙の『子どもの詩』欄に載った一編で、作者は小学3年生の男児である。「人生」や「命」といった大人でもときに持て余す重たいテーマに、こういう洞察のできる年ごろである。その記事を読み返しながらか、ため息をひとつ、ついてみる◆「子供が18人います。1日に3人ずつ殺すと、何日で全員を殺せるでし

ょう?」。愛知県岡崎市の市立小学校で3年生のクラスを担任する男性教諭が、算数の授業でそういう出題をしたという。市の教育委員会は口頭で嚴重注意し、担任を外した。児童の興味を引くためにリンゴやミカンとは違う出題をしたらよい、冒頭の詩と読み比べて、どちらが大人でどちらが子供か分からない◆本紙掲載の詩を、もう一つ引く。題は『右側が見えづらい弟』、障害をもつ弟のことを書いている。その一節。へだから私はいつも弟の右側にいる。◆子供をなめてはいけない。

『よのなかのルール』（藤原和博・宮台真司著、ちくま文庫）では、報道番組（1997年、TBS ニュース 23）に出演した男子高校生が「なぜ殺人がいけないのか分からない。自分は法律の罰が怖いから殺さないだけだ」と発言して大人社会にショックを与えたことを引用し、「この疑問に大人がちゃんと答えられるかどうかは、実はさして重要ではありません。そうではなく、そうした疑問を子どもが抱く時点で、大人社会は既に敗北しているのです。」と書いています。また、自尊心・尊厳を養うことができない人は他人を殺し、自分を殺すことになると文章を続けています。

コラムの小学校3年生たちは教室でどんな反応をしたのでしょうか。家庭で保護者になんと伝えたのでしょうか。「子どもをなめてはいけないよ。」子どものそのような声が聞こえそうな気がします。どんなに幼くても、一日一日人間の知恵を確かなものにしていく健やかな育ちを祈り願っています。

